榆木小学校　学校通信
No.４７
なりたい自分になる！
PLUS ULTRA
令和７年３月２４日
文責　余宮

ありがとう！

令和６年度を終えるにあたり、保護者の皆様方のご理解とご協力に職員一同心から感謝申し上げます。

PLUS ULTRA の可能性はコミュニティーの中に在る

ある朝の出来事。１年生のお子さんが、裏門前にポツンと立っています。どうしたんだろうな。ずいぶん長い時間がたったような気がします。すると、向こうから同じ黄色い帽子をかぶったお友達がやってきます。あっ、もしかしたら待ち合わせをしていたのかな。目と目が合い、言葉を交わすことなく、２人は門を一緒にくぐりました。そこにあったのは、安心感のある暖かなピンク色の空気。無粋な声をかけなくて、本当に良かった。

この子たちは、今日もまた安心して学びに没頭し、自分でも知らなかった自分に驚きつつ、新しいなりたい自分を目指して、もっと向こうへ大切な一歩を踏み出すことでしょう。

私たちは、つい目に見えたところに注目しがちです。だから、大活躍のその瞬間に、その成長は起きた、と勘違いをしてしまう。世の中に幾多あるハウツー本には、その瞬間を逃すな、と啓発してあります。確かにそういう面もあるでしょう。

しかし、本来の成長は時間軸―その過程に埋め込まれているはずです。これをしたから成功が保障される、あれをしたからうまくいく、という幻想は、甘味な対処です。多くの称賛を浴びるその節目ごとの瞬間に感じる成功体験は、本当に気持ちがよいものです。ただ、それを成長とは言わないのではないか、と私は思うのです。

時間軸で考える場合、成長を促す「かかわり」が不可欠です。きっかけと言い換えられるかもしれません。その「かかわり」は、そんな甘いものではない場合が多い。なぜなら、自分ではたどり着けなかった出来事を攻略するための変化を、強烈に促すのですから。痛痒い出来事なのです。同時に、そこには痛痒さを癒し、ちょっとした暴走を赦し、変化の様を援けるコミュニティーが存在します。痛くて辛くて、そして優しくて安心するコミュニティー。どっちだよ！と突っ込みたくなるんだけど、コミュニティーはそんな相矛盾する性質をもつものなのだと改めて思います。コロナ禍、人とのかかわりを絶たれた私たちは、強烈にそれを求めました。これまで、煩わしい存在であったそのかかわりを、なぜか求めたのです。それこそが、私たちの生活には、その痛痒さが不可欠だという証左ではないか、と。

多分、人は一人では生きていけないのだと思う。

１年生のお子さんが求めた小さなコミュニティーは、長い長い時間軸の中の今の自分を見つめる大切な「かかわり」だった。昨日までの自分を確かめ、安心して自分を表現できる場所。でも、いつもいつも同じじゃなくて、時には強烈な変化を求められる痛痒い場所で、なりたい自分になるために変わろうとする節目に優しく寄り添う、そんな場所。

PLUS ULTRA の可能性は、いつもコミュニティーの中に在る、と私は思います。

もっと先へ、今より向こうへ、なりたい自分になるための鍵は、常にコミュニティーの中に在り、そして、あなたも誰かのコミュニティーで在る。そんなことを、ほのぼのとした朝の一場面に、強く感じました。

・・・